



カール・マルクス著
フリードリヒ・エンゲルス編
長谷部文雄譯

資本論

經濟學批判

第三部
下冊

青木書店版

目次

第五篇 利子と企業者利得への利潤の分裂。利子生み資本（つづき）	
第二十九章 銀行資本の諸成分	六五七
第三十章 貨幣資本と現實資本 I	六七五
（商業信用、六六九——産業循環の種々の段階における貨幣資本と現實資本、六七七）	
第三十一章 貨幣資本と現實資本 II（つづき）	七〇〇
第一節 貸付資本への貨幣の轉形	七〇〇
（貸付資本の分量は現存貨幣の分量から獨立する、七〇〇）	
第二節 貸付資本に轉形される貨幣への、資本または收入の轉形	七二〇
第三十二章 貨幣資本と現實資本 III（終り）	七二四
（現實資本の遊離による貸付資本の形成、七二五、——概説、七二七、——結論、七三〇）	
第三十三章 信用制度下の流通手段	七三七

第三十四章	通貨主義と一八四四年のイギリス銀行立法	七七三
第三十五章	貴金屬と爲替相場	七九八
第一節	金準備の運動	七九八
第二節	爲替相場	八三二
	(對アジア爲替相場、八二四、——イギリスの貿易差額、八三三)	
第三十六章	先資本制的なるもの	八三七
	(中世における利子、八六一、——教會にとつての利子禁止の效用、八六四)	
第六篇	超過利潤の地代への轉形	
第三十七章	緒論	八六五
第三十八章	差額地代。概説	九〇二
第三十九章	差額地代の第一形態(差額地代Ⅰ)	九二三
第四十章	差額地代の第二形態(差額地代Ⅱ)	九四九
第四十一章	差額地代Ⅱ——第一例、生産價格が不變な場合	九六六
第四十二章	差額地代Ⅱ——第二例、生産價格が低落する場合	九七七

I	追加的資本投下の生産性が同等不變な場合	九七
II	追加的諸資本の生産性の率が低落する場合	九八九
III	追加的諸資本の生産性の率が増加する場合	九九一
第四十三章	差額地代 II —— 第三例、生産價格が昂騰する場合。結論	一〇〇一
第四十四章	差額地代は最劣等耕作地でも生ずる	一〇〇一
	〔繼起的諸投資の生産力が増加する場合、一〇四七、——追加諸資本の生産力が減少する場合、一〇五〇、——差額地代と、土地に合體された資本の單なる利子としての地代、一〇五三〕	
第四十五章	絶對地代	一〇五五
第四十六章	建築地地代。鑛山地代。土地價格	一〇八九
第四十七章	資本制的地代の發生史	一〇一一
第一節	緒論	一〇一一
第二節	勞働地代	一一一
第三節	生産物地代	一一九
第四節	貨幣地代	一二三

第五節 分益經營と農民的分割地所有……………一三〇

第七篇 收入とその源泉

第四十八章 三位一體の範式……………一四七

I ……………一四七

II ……………一四九

III ……………一五一

第四十九章 生産過程の分析のために……………一七三

第五十章 競争の假象……………二〇一

第五十一章 分配諸關係と生産諸關係……………二三五

第五十二章 階級……………二四五

附 録 インステイテュート版正誤表……………二四七

第二十九章 銀行資本の諸成分

(507)

さて、銀行資本は何から成りたつかを詳しく吟味することが必要である。

* Bankkapital (=Bankierkapital, banking capital) —— 譯者。

以上で見たように、フラートンその他は、流通手段としての貨幣と支拂手段としての（また、金流出が問題となるかぎりでは世界貨幣としての）貨幣との區別を、流通手段（カレンシー）と資本との區別に轉化する。

資本がここで演ずる特異な役割から、啓蒙された經濟學が貨幣は資本でないことを入念に打刻しようとしたのと同様な入念さを以て、この銀行主義經濟學は、事實上貨幣は資本カレンシー・ペーニエ・クレシスそれ自體だということカレンシー・ペーニエ・クレシスを打刻することになる。

だがこの場合には、貨幣資本が、利子生み資本の意味での *moneyed capital* と混同されるのだが、第一の意味では、貨幣資本はつねに、他の資本形態たる商品資本および生産資本と區別されるものとして、資本の一通過形態たるにすぎぬということを、吾々は後段の研究で明かにしよう。

銀行資本は、(一)、現金たる金または銀行券と、(二)、有價證券とから、成りたつ。有價證券を吾々はさらに二つの部分に分けることができる。すなわち、商業證券たる手形——これは浮動的であり、時々刻々満期となり、その割引こそは銀行業者の本來的業務をなす——と、公的有價證券、たとえば國家證券、國庫證券、あらゆる種類の株式、要するに利子生み證券——といっても手形と

は本質的に異なる利子生み證券——とである。抵當證券もこれに加えることができる。これらの物象的諸成分から成りたつ資本は、ふたたび、銀行業者自身の投下資本と、彼の銀行資本または借受資本をなす預金とに、分割される。發券銀行のばあいには更らに銀行券がつけ加わる。預金と銀行券とはさしあたり問題外におこう。これらの種々なる要素が銀行業者の自己資本を代表するか、他人の資本たる預金を代表するかは、銀行資本の現實的成分——貨幣、手形、保管證券——を何ら變化させない、ということだけは明かである。銀行業者が自己資本だけで營業するにしても、自分の手に預託された資本だけで營業するにしても、區分は同じである。

利子生み資本の形態は、一定した常則的な貨幣収入がいずれも一資本の利子として現象する——それが一資本から生ずるか否かとわず——ということに伴う。まず貨幣収入が利子に轉形され、ついで利子とともに、その源泉たる資本なるものがあらわれる。同様に、利子生み資本とともに、あらゆる價值額は、それが収入として支出されない場合には資本として、すなわち、それが生みうる可能的または現實的利子に對立する元金 (Principal) として、現象する。

事態は簡單である。平均利子歩合が年に5%だとしよう。すると、五百ポンドの金額が利子生み資本に轉化されれば、年に二十五ポンドをもたらずである。そこで、二十五ポンドという確實な年収入はいずれも、五百ポンドという一資本の利子と看なされる。だがこれは、この二十五ポンドの源泉たるものが單なる所有名義または債權であるか、それとも例えば地所のような現實的生産要素であるかを問わず、その源泉たるものが直接に移讓されうるものなる場合、または移讓されうるものとなる形態を受けとる場合を除けば、純粹に幻想的な表象であり、またかかる表象たるにとど

まる。實例として國債と勞賃をとって見よう。

國家はその債權者にたいし、年々、借受資本に特定分量の利子を支拂わねばならぬ。債權者はこの場合、自分の債務者に解約告知をなすことはできぬのであって、ただ、請求權を——請求權所有名義を——賣りうるだけである。資本そのものは、國家によって喰いつくされ、支出されている。それはもはや實存しない。國家の債權者が所有するものは、(一)、たとえば百ポンドという國家の債務證券であつて、(二)、この債務證券は債權者にたいし、年々の國家收入すなわち年々の租稅收入につき、特定額たとえば五ポンドまたは五%だけの請求權を與えるのであり、(三)、債權者はこの百ポンドの債務證券を隨意に他人に賣ることが出来る。利子歩合が五%であり、その國家保證が前提されているならば、所有者Aはその債務證券を通例百ポンドでBに賣ることが出来る。けれどBにとっては、彼が百ポンドを年に五%で貸出すか、百ポンドを支拂つて國家による年五ポンドだけの實物を確保するかは、同じことだからである。だが、すべてこれらの場合には、資本——國家の支拂がその利子と看なされる資本は、幻想的なもの、假空資本たるにとどまる。國家に貸付けられた金額は總じてもはや實存しない、というだけではない。その金額は決して資本として支出される——投資される——はずではなかつたのであって、その金額は、それが資本として投下されることによつてのみ、みづからを維持する價値に轉形されえたであらう。もとの債權者Aにとっては、年々の租稅のうち彼の手に歸する部分は彼の資本の利子を代表するのであって、そのことは、高利貸にとり、浪費者の資産のうち彼の手に歸する部分が彼の資本の利子を代表するのと同様である、——といつても、どちらの場合にも、貸付けられた貨幣額は資本として支出されたのではないのだ

(509)

が。國家の債務證券を賣る可能性は、Aにとっては、元金の可能的還流を代表する。Bについて云えば、彼の私的見地からすれば、彼の資本は利子生み資本として投下されている。事實上では、彼はAにとって代っただけであり、國家にたいするAの債權を買ったのである。こうした取引がなおつき／＼に行われるかもしれないが、國債なる資本は依然として純粹に假空のものであって、その債務證券が賣れえないものとなる瞬間から、この資本という假象はなくなるであろう。にもかかわらず、すぐ／＼に見るであらうように、この假空資本はそれ独自の運動をなす。

國債という資本ではマイナスが資本として現象するが、——そも／＼利子生み資本なるものが凡ゆる錯亂した形態の母であって、たとえば、債務は銀行業者の表象では商品として現象しうるが、——この國債資本に對立させて、つぎに勞働力を考察しよう。勞賃はこの場合には利子と解され、したがって勞働力は、この利子をもたらす資本と解される。たとえば一年間の勞賃が五十ポンド、利子歩合が5%とすれば、一年間の勞働力は千ポンドの資本に等しいものと看なされる。資本家的表象様式の錯亂はここでその絶頂に達する。けだし、資本の増殖を勞働力の搾取から説明する代りに、その逆に、勞働力の生産性が、勞働力そのものはこの神祕物たる利子生み資本だということから説明されるからである。十七世紀の後半には（たとえばベティのばあい）これが愛好される表象であったが、この表象は今日でも、部分的には俗流經濟學者により、部分的には——また主として——ドイツの統計學者によって、大まじめに用いられる。ここでは殘念ながら、この無思想的表象を不愉快に妨げる二つの事情が生ずるのであって、その第一は、勞働者はこの利子を受けとるために勞働せねばならぬということであり、第二は、勞働者は自分の勞働力の資本價値を移讓によつて

は貨幣化しえないということである。むしろ、彼の労働力の年価値は彼の年平均賃銀に等しいのであって、彼が自分の労働により労働力の買手のために填補せねばならぬものこそは、右の価値そのもの、プラス、この価値の増殖分たる剰餘価値なのである。奴隸制度のもとでは、労働者は資本価値、すなわち彼の購買価格を有する。そして彼が貸貸される場合には、賃借人はまずこの購買価格の利子を支拂い、そのうえになお、この資本の年々の磨損分を填補しなければならぬ。

(九三) 「原典では本章以下が第二分冊となり、註の番號が新たに一から始まるが、この譯書では通し番號とした。——譯者。』『労働者は、その年々の稼ぎの貨幣価値を利子額と看なせば算出される資本価値を有する。……もし……一日の平均賃銀率を四%で資本化すれば、一人の男子農業労働者の平均価値は、ドイツ領オーストリアでは千五百ターレル、プロイセンでは千五百ターレル、イングランドでは三千七百五十ターレル、フランスでは二千ターレル、ロシア内地では七百五十ターレル、となる。』(フォン・レーデン『比較文化統計』、ベルリン、一八四八年、四三四頁。)

架空資本の形成は資本化と呼ばれる。規則正しく反復される収入は、平均利子歩合に従って——この利子歩合で貸出される一資本がもたらすべき額として——計算することによって、資本化される。たとえば年収入が百ポンドで利子歩合が五%ならば、この百ポンドは二千ポンドの年利子である。そこでこの二千ポンドが、年額百ポンドにたいする法律上の所有名義の資本価値たる意義をもつ。そこで、この所有名義を買う人にとっては、百ポンドの年収入は事實上、彼の投下資本に生ずる五%の利子を表わす。かくして、資本の現實的増殖過程との一切の關連が最後の痕跡にいたるまで消えうせて、資本とは自己自身によって自己を増殖する自動機構だという表象が確立する。

債務證券——有價證券——が國債のばあいのように純粹に幻想的な資本を表示するのでない場合

でも、この證券の資本價値は純粹に幻想的なものである。さきに見たように、信用業は結合資本を生みだす。證券はこの資本を表示する所有名義たる意義をもつ。鐵道會社、鑛山會社、船會社などの株式は、現實資本、すなわち、これらの企業に投下されて機能しつつある資本、または、資本としてかかる企業に支出されるために株主たちによって前貸されて貨幣額を、表示する。といっても、それらの株式が單なる眩惑を表示することがない譯では決してない。だがこの資本は、二重に、すなわち一度は所有名義たる株式の資本價値として、もう一度は、右の諸企業に現實に投下された・または投下されるべき・資本として、實存するのではない。それは後者の形態でのみ實存するのであって、株式は、この資本によって實現されるべき剩餘價値にたいする按分比例的な所有名義に他ならない。Aはこの名義をBに賣り、BはこれをCに賣るかもしれない。こうした取引は事態の本性を何ら變化させない。右の場合、AまたはBは自分の名義を資本に轉形したのであるが、Cは自分の資本を、株式資本から期待されるべき剩餘價値の單なる所有名義に轉形したのである。

この所有名義——國家證券ばかりでなく、なおまた株式——の價値の自立的運動は、この所有名義が、それによっておそらく代表される資本または請求權のほかに、現實の資本を形成するかのよるな假象を確定する。すなわちこの所有名義は、商品——獨自の運動と定まり方をする價格をもつ商品となる。その市場價値は、現實資本の價値が（價値増殖も）變動しなくても、その名目價値とは異なる定まり方をする。一面では、その市場價値は、収益——これに對する權利名義をかの所有名義が與える——の高さと確實さにつれて動搖する。ある株式の名目價値、すなわちその株式が本源的に代表する拂込額が百ポンドであつて、その企業が五%でなく一〇%の収益をもたらすとす

れば、その他の事情が同等不変であり、また利子歩合が5%ならば、その株式の市場価値は二百ポンドに増大する。けだし、5%で資本化すれば、その株式はいまや二百ポンドの架空資本を表示するからである。これを二百ポンドで買う人は、この資本投下から5%の収入をえる。この企業の収益が減少すれば逆である。この證券の市場価値は、部分的には投機的なものである。というのは、この市場価値は、現実の収入によって規定されているばかりでなく、期待される・あらかじめ計算される・収入によって規定されているからである。だが、現實資本の價值増殖を不變なものと前提すれば、または、國債のばあいのように何らの資本も實存しない場合は、年々の収益が法律によって固定され、その他の點も充分に確實なものと前提すれば、この有價證券の價格は利子歩合と逆に騰落する。利子歩合が5%から一〇%に昂騰すれば、五ポンドの収益を保證する有價證券は、もはや五十ポンドの資本しか表示しない。利子歩合が二 $\frac{1}{2}$ %に低落すれば、同じ有價證券が二百ポンドの資本を表示する。有價證券の價值は、つねに、収益を資本化したもの、すなわち、幻想的な資本につき當時の利子歩合にしたがって収益を計算したものに他ならない。だから、貨幣市場の逼迫時代には、これらの有價證券の價格は二重に下落するであろう。けだし、第一には利子歩合が昂騰するからであり、第二には、貨幣に實現するために有價證券が大量的に市場に投出されるからである。この價格下落は、この有價證券が所有者に保證する収益が國家證券の場合のように不變である。この有價證券が代表する現實資本の價值増殖が産業的企業の場合のように恐らく再生産過程の擾亂によって影響されようと、そうしたことは係わりなく生ずる。この最後の場合には、上述の價值減少のうえに、もう一つの價值減少が加わるだけである。嵐がすぎ去れば、これらの有價

(512)

證券は、失敗企業または眩惑企業を表示しないかぎり、ふたたび、その従來の高さに騰貴する。恐慌中の有價證券の價值減少は、貨幣財産集中の力づよい手段として作用する。^(九四)

(九四) 二月革命の直後に、パリで商品や有價證券が極度に價值減少をきたして全く賣れなかつたとき、ヴァブール在住のスイス人商人たるR・ツウィルヘンバルト氏は(私の父に語つたところによれば)できるだけの貨幣を作り、その現金をもつてパリに旅してロスチャイルドのところゆき、共同事業をしようと申出た。ロスチャイルドはじつと彼を見つめていたが、急に近づいて彼の兩肩に手をかけた。——貨幣をおもちですか? ——はい、男爵さん。——では、ごいっしょにやりましょう! ——そこで彼等はいずれもうまい商賣をやつた。——F・エンゲルス。

これらの證券の價值減少または價值増大が、これらの證券によって代表される現實資本の價值運動と無關係であるかぎり、一國民の富は、この價值減少または價值増大の前後ともまったく同じ大いさである。『一八四七年十月二十三日には、公的有價證券や運河および鐵道株はすでに一億一千四百七十二萬五千二百二十五ポンドの價值減少をきたしていた。』(『商業的窮境』に關する報告、一八四七—四八年「二八八頁、第三八〇號」における、イングラント銀行總裁モリスの陳述。)これらの有價證券の價值減少が、生産および鐵道や運河による交通の現實的停止とか、着手された企業の中止とか、まったく無價値な企業での資本の放棄とかを表現しなかつたかぎり、國民は、名目的貨幣資本のかかるシャボン玉の破裂によつてはピタ一文も貧乏にはしなかつた。

これら一切の證券は、事實上、將來の生産にたいする請求權・權利名義・の蓄積以外には何も表示しないのであつて、この請求權・權利名義・の貨幣または資本價值は、國債の場合のように全

く何らの資本も代表しないか、さもなければ、それによって表示される現實資本の價值には係わりなく調整される。

すべての資本制的生産諸國には、尨大量のいわゆる利子生み資本または moneyed capital がこの形態で現存する。そして貨幣資本の蓄積なるものは、大部分は、生産にたいするこれらの請求權の蓄積・これらの請求權の市場價格——幻想的資本價值——の蓄積・以外の何ものとも解すべきではない。

ところで、銀行資本の一部分はこのいわゆる利子生み證券に投下されている。この部分そのものは、現實の銀行業務では機能しない準備資本の一部分である。その最大部分は手形、すなわち、産業資本家または商人たちの支拂契約書から成りたつ。貨幣の貸手にとっては、これらの手形は利子生み證券である。すなわち彼は、手形を買う場合、それがまだこれから通用する期間分の利子を差引く。これは割引と呼ばれる。だから、手形の表示する金額のうちだけが差引かれるかは、その時々々の利子歩合によって定まる。——

最後に、銀行業者の資本の最後の部分は、金または銀行券からなる彼の貨幣準備から成りたつ。預金は、長期契約のものでなければ、いつでも預金者によって自由にされる。それはたえず増減する。だが、それがあつた人によって引出されるときには他の人によって補充されるのであり、したがつて、取引が正常的に行われている時期の一般的な平均額は殆んど動搖しない。

銀行の準備金は、資本制的生産の發展した諸國では、平均的にはつねに、蓄藏貨幣として現存する貨幣の大きさを表現するのであつて、この蓄藏貨幣の一部分は、それ自身ふたたび、自己價值で

はない證券——金〔貨幣?〕の單なる支拂指圖書——から成りたつ。だから、銀行資本の最大部分は純粹に假空のものであって、債權（手形）、國家證券（これは過去の資本を代表する）、および株式（將來の収益の支拂指圖書）から成りたつ。この場合に忘れてはならぬことは、これらの證券が銀行業者のふところに表示する資本の貨幣價值は、これらの證券が確實な収益の支拂指圖書（國家證券の場合のように）であるか現實資本の所有名義（株式の場合のように）である限りでさえも、まったく假空のものであって、それらにより少くも部分的には表示される現實資本の價值とは離れて調整される——または、これらの證券が單なる収益請求權を表示するだけで何らの資本も表示しない場合には、同じ収益にたいする請求權が、たえず變動する假空の貨幣資本で表現される——ということ、これである。そのうえさらに、この假空銀行資本の大部分は、銀行業者の資本を表示するのではなく、利子の有無を問わず彼のもとに預託された公衆の資本を表示する、ということも忘れてはならない。

預金はつねに貨幣で——金または銀行券で、またはこれらに對する支拂指圖書で——爲される。現實的流通の必要にしたがつて收縮または膨脹する準備金を除けば、これらの預金は、現實にはつねに、一方では産業資本家や商人——彼等は、その預金で手形を割引され、またその預金で前貸をされる——の手にあり、他方では、有價證券取扱業者（取引所ブローカー）の手に、または自分の有價證券を賣った私人の手に、または政府の手に（國庫證券や新債の場合）ある。預金そのものは二重の役割を演ずる。一方ではそれは、いま言及したように利子生み資本として貸出されるのであり、したがって銀行の金庫には見出されないので、預金者の貸方として銀行の帳簿にのみ現われる。

他方では預金は、預金者たちの相互的貸越が彼等の預金にたいする小切手によって決済されて相互に差引かれるかぎりでは、かかる單なる帳簿金額として機能するのであって、この場合、それらの預金が同じ銀行業者の手もとにあり、したがってこの銀行業者が相異なる預金者たちの勘定相互間で差引をするか、それとも、彼等の小切手を相互に交換しあう相異なる諸銀行によってこの差引が行われて、その差額だけが支拂われるかは、全くどうでもよいことである。

利子生み資本および信用制度の發展につれて、同じ資本が——または單に同じ債權でも——相異なる人々の手で相異なる形態をとって現われる様式の相違により、あらゆる資本が二倍にも、場合によっては三倍にも、見える。^(九五)この『貨幣資本』の最大部分は、純粹に假空のものである。總預金^{デポジツト}は——準備金を除けば——銀行業者にたいする貸越金に他ならないが、それは保管金^{デポジット}中には質存しない。それが振替業務に役だつかぎりでは、銀行業者によって貸出されたのち、銀行業者にとっての資本として機能する。銀行業者たちは相互に、これらの貸越金の相互決済により、質存しない諸預金にたいする相互的な支拂指圖書を支拂いあう。

(九五) 資本のかかる二倍化・三倍化は近年になってさらに著しく發展した、——たとえば、ロンドンの取引所報告中ですでに特別欄を占めている諸々の金融トラストによって、特定種類の利子生み證券——たとえば、外國の國家證券、イギリスの都市債券またはアメリカの公債證券、鐵道株、などを買入れるための會社ができる。たとえば二百萬ポンドの資本が株式募集によってつくられる。管理部が當該有價證券を買入れ、または多かれ少かれ活潑にそれらの有價證券で投機を行い、年々の利子収益から費用を差引いたものを、配當として株主に分配する。——さらに、若干の株式會社にあっては、普通株を優先株 (Preferred) と讓先株 (Deferred) との二種類に分ける習慣が生じた。優先株は、總利潤によって許されるならばという前提のもと